

アレルギーモデルマウスの実際の運用例

- アレルギー増悪因子の検定 -

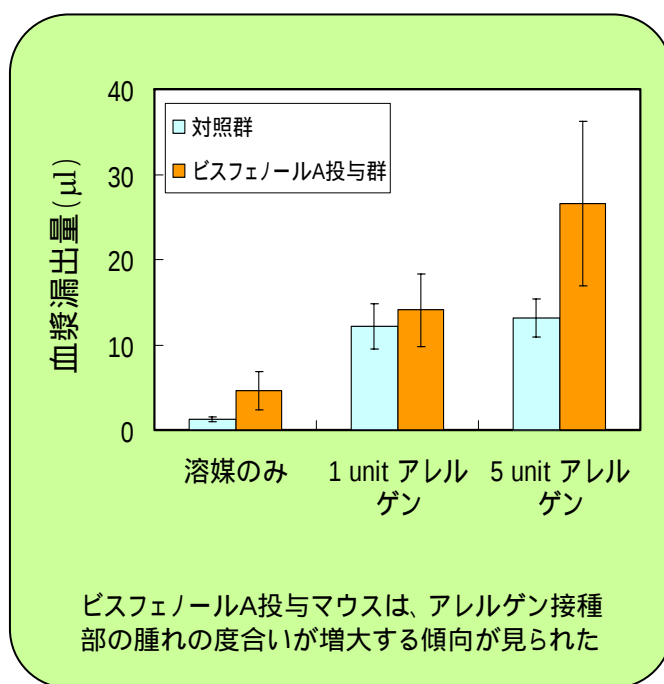
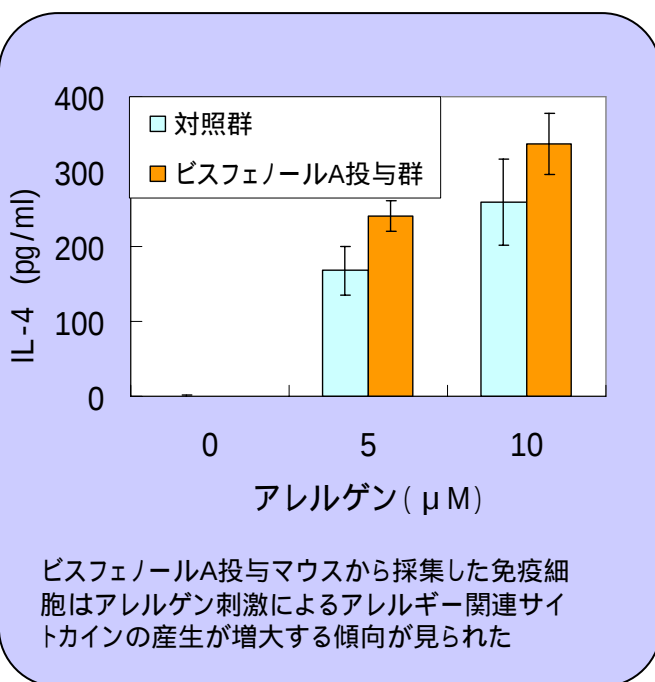
目的

花粉症やアトピー性皮膚炎をはじめとする、アレルギー疾患患者数は年々増加しているが、その原因は諸説あり、定かではない。そこで、当研究室において開発したアレルギーモデル動物系を、アレルギーを悪化させる因子の検索に応用した。このケースでは環境ホルモンとして知られるビスフェノールAのアレルギーへの関与を検討した。

研究の内容

ビスフェノールA (10 mg/L) 水溶液をアレルギーモデルマウスに二週間、経口自由摂取させた。その後、マウスから採集した免疫細胞をアレルギーで刺激し、培養し、アレルギー関連サイトカイン (IL-4) の産生を検討した。また同時に、マウスのアレルギー特異的皮膚反応を検討した。

結果:



今後の展開

このアレルギーモデルマウスはアレルギーを抑制する因子のみならず、増悪させる因子の探索にも応用可能であることが示唆された。今後は免疫細胞の応答性の変化と実際の個体の症状の関連性を詳細に解析し、より簡便な検証法の開発を目指していく予定である。

